

第17回青森県総合教育会議会議録

- 1 期 日 令和5年2月22日（水）
- 2 開 会 午後3時
- 3 閉 会 午後4時
- 4 場 所 第三応接室
- 5 議 事 本県の未来を担う子どもの健康づくりについて
- 6 出席者等
 - ・出席者の氏名
和嶋延寿（教育長）、野澤正樹（教育委員）、平間恵美（教育委員）、
戸塚学（教育委員）、安田 博（教育委員）
 - ・説明のために出席した者の氏名
小坂秀滋（教育次長）、吉田忠一（教育次長）、白戸克幸（教育政策課長）
伊藤明德（スポーツ健康課長）

7 概 要

知事挨拶

総合教育会議では、教育を行うための諸条件の整備等と教育の振興を図るため重点的に講ずべき施策について、教育委員の皆様と協議する場となっている。

本日は「本県の未来を担う子どもの健康づくり」ということで、これまで教育委員会とともに努力してきたが、肥満傾向児出現率は全国トップレベルを維持していることから、今回の予算では、保育園、幼稚園の頃からの状況を調べながら、全体的にもう一度組み立て直すこととしている。教育委員の皆様からは、いかに子どもたちを健やかに育てていくかということでお話しがあると思うが、小児糖尿病など非常に困った状況があり、それが結局は40代、50代の不健康な状況につながり、短命県につながっているため、小さい頃からしっかり取り組んでいくということがテーマとなっている。

6月28日に退任することから、総合教育会議としては最後になる。その件については、締め挨拶でお話しさせていただくが、本日は、積極果敢な意見交換をお願いしたい。

議事 本県の未来を担う子どもの健康づくりについて

(伊藤スポーツ健康課長)

本県の未来を担う子どもの健康づくりをテーマとして、県教育委員会の取組について御説明する。

1 ページを御覧いただきたい。

県教育委員会では、県が2013年3月に策定した健康増進計画「健康あおもり21（第2次）」で示された児童生徒に関連する数値目標の達成などを目的として、「青森県学校保健推進計画」を策定している。

2019年2月に策定した第3次計画では、2019年度から2023年度までの5年間を計画期間としている。

「青森県学校保健推進計画」では、下段に記載のとおり、重点項目を8項目設定している。

中でも、「望ましい生活習慣定着の推進」については、本県の平均寿命が全国最下位である状況などから、最重点課題としている。

望ましい生活習慣定着の推進については、赤線で囲んでいるとおり、体格、栄養・食生活等の4項目について、それぞれ目標の達成に向けて事業を実施している。

本日は、時間も限られているので、「望ましい生活習慣定着の推進」に係る4項目に絞って次ページ以降で取組状況等を説明させていただく。

2 ページを御覧いただきたい。

まず、①「体格、栄養・食生活」では、上段に記載しているとおり、肥満傾向児出現率の減少等について、数値目標が定められている。

県教育委員会の主な取組として、下段に記載のとおり、「いきいき青森っ子健康づく

り事業」の中で、「健康教育実践研究校」を11校指定しており、研究校では、幼児児童生徒の健康課題解決のため、外部専門家等の協力を得ながら、健康教育の実践研究を行っている。

資料には、研究校となった幼稚園の取組の画像を掲載しているが、当該校では、体を動かす様々な活動に対する意欲を高めようと、柔らかいゴムボールを使った体操やストレッチ運動などを行ったり、親子体操教室を開催して、親子一緒にできる運動遊びを行ったりした。

なお、研究校の取組の成果については、資料集に取りまとめて県内すべての学校に配布し、各校の取組の参考として活用していただいている。

これらの取組の成果として、健康教育の重要性等についての理解が進んだことにより、学校での健康教育の実施率は、小学校では平成21年度の約60パーセントから令和3年度約90パーセントに、中学校でも平成21年度の約35パーセントから令和3年度85パーセントに向上しているが、取組の目標としている肥満傾向児出現率については各校種とも目標値に到達していない状況となっている。

次に、3ページを御覧いただきたい。

②「身体活動・運動」では、上段に記載しているとおり、体育の授業を除いた、平日に運動・スポーツを週3日以上する児童生徒の割合の増加に向けた、数値目標が定められている。

下段の県教育委員会の主な取組であるが、令和2年度から重点事業で行っている「楽しさアップ！子どもの健康づくり事業」により、小学校1・2年生をターゲットに絞って取り組んでいる。

具体的な取組内容として、まず、「体育の楽しさアップ研修会」についてであるが、低学年の教員を対象に「楽しい体育の授業づくり」についての研修を行っている。画像アについては、本県児童の投力（投げる力）が低いという課題を踏まえた、投げる運動に子どもたちが楽しみながら取り組めるようにするための授業づくりについての研修の様子である。

次に、「運動プログラムの開発」については、誰でもどこでもいつでも楽しくできる運動をコンセプトに、弘前大学と共同で「運動プログラム」の開発に取り組んだものである。画像イは、ボール運動の基礎となる指先や空間認知などの感覚を養うためのプログラムの活動の様子である。また、「運動遊びチャレンジカード」については、画像ウのとおり、県内40市町村のPRキャラクターを配したカードとなっており、5分間運動遊びをするごとに1マス色を塗っていき、クリアすればシールがもらえるという子どもにとって楽しい仕掛けとしている。

事業の成果として、低学年の児童について運動実施時間が向上しているが、取組の目標としている小学校5年生、中学校2年生のスポーツ実施状況については、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響もあると思うが、計画作成時の2017年よりも低くなっている状況である。

次に、4ページを御覧いただきたい。

③「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」では、上段に記載しているとおり、喫煙・飲酒・薬

物乱用防止教室の実施率の増加に向けた数値目標が定められている。

下段の県教育委員会の主な取組であるが、令和元年度に実施した薬物乱用防止教育等推進事業の中で、薬物乱用防止教育の効果的な指導方法等について、わかりやすくまとめた事業報告書を作成し、県内すべての学校に配布している。

また、項目①でも紹介した「いきいき青森っ子健康づくり事業」の研究校でも、薬物乱用防止教育に取り組んでおり、資料に掲載している研究校の小学校では、防煙教室の中で、たばこの三大有害物質であるニコチン、タール、一酸化炭素をドクロに見立てて、子どもたちに視覚的にたばこの有害性を伝える工夫をしている。

ただし、取組の目標としている喫煙・飲酒・薬物乱用防止教室の実施率の増加については、まだ、目標値に到達していない状況となっている。

5 ページを御覧いただきたい。

④「歯科保健」では、上段に記載しているとおり、12歳児のう歯本数の減少等に向けた数値目標が定められている。

下段の県教育委員会の主な取組であるが、項目①でも紹介した「いきいき青森っ子健康づくり事業」の研究校では、毎日の学校生活の中で、歯や口の健康づくりに取り組んでいる。

資料には、研究校の幼稚園の取組の画像を掲載しているが、当該校では、歯磨き指導のために紙芝居や手作りパネルを使ったり、手鏡を使って歯ブラシの毛先の当たり具合を確認させたりするなどの工夫をしている。

そのほか、今年度の新たな取組として、県歯科医師会や健康福祉部と連携しながら、児童生徒のむし歯予防のためにフッ化物洗口を学校で集団実施する場合の実施方法や留意点等を取りまとめた「フッ化物洗口マニュアル」の作成を進めているところである。

しかしながら、取組の目標としているう歯被患率の減少等については、校種によって達成できていない状況となっている。

6 ページを御覧いただきたい。

今後の新たな取組についてであるが、県教育委員会では、これまでの様々な取組の成果も踏まえつつ、今後は、健康福祉部とも協力しながら取組を強化していくこととし、令和5年度の新規重点事業として「県民の未来の健康創造事業」を立ち上げ、令和10年度までの6年間にわたって取り組んでいくこととしている。

具体的には、取組1の子どもと保護者の生活習慣実態調査については、肥満傾向児が多い要因を把握するため、児童生徒とその保護者を対象とした実態調査を実施し、大学教授等の専門家や庁内関係課で構成する検討委員会において、実態に応じた取組を検討することとしている。

また、取組2の体育・食育の楽しさアップ研修会については、今年度低学年の教員を対象に実施した「体育の楽しい授業づくりに係る研修」を中学年でも実施するものであるが、食育に係る研修を合わせて行うことにより、児童の運動習慣の定着とともに、朝食摂取率の向上など、児童の食生活の改善を図っていきたいと考えている。

最後に、まとめとして、本県の未来を担う子どもたちが、健やかに成長できるようにするためにも、望ましい生活習慣の基盤をつくっていくことが重要だと考えている。

また、2023年度は、第3次「青森県学校保健推進計画」の計画期間の最終年度となっているが、それぞれの取組に係る数値目標については、先ほども御説明したように項目によって達成できていない状況となっている。

このため、県教育委員会では、目標の達成に向け、引き続き、学校、家庭、地域、専門機関等と連携しながら、本県の未来を担う子どもの健康づくりを推進していきたいと考えている。

(野澤委員)

冒頭知事から、肥満傾向児出現率が数値目標に届いていないというお話があったが、私も肥満にならないように、子どもや孫から常に注意されている。

私からは、今回、青森県学校保健推進計画を軸にした中で、子どもたちがもっと自覚することが重要であること、健康を維持するには生活習慣が一番大事であるため、それについての家庭との連携、健康であるためのスポーツを念頭に置き、本県の未来を担う子どもの健康づくりについて、数値目標の改善と推進計画の発展の視点から、3点について意見を述べる。

1点目は、子どもたちの望ましい生活習慣定着のためには、子どもたちが自分の健康のあり方を常に意識し強く持ち続けることが大事だと思う。子どもたちが「自分の健康とはこうである、そのためにはこうでありたい」という、いわゆるウェルビーイングを子どもなりに、学校教育の初期の段階、幼少期から語れるようなものをつくってあげたいと思う。我々はこういう年齢になったが、人生100年時代において、自分の健康を習慣として意識させ持続していく仕掛けづくりが大事であり、それによってかなり変わるのではないかと思う。

青森県立保健大学の吉池学長がウェルビーイングを提案しているが、それは「病気になること」「元気に歩けること」「美味しくごはんが食べられること」「仲間と楽しく過ごせること」であり、これらを子どもの早い段階から生涯を通して、常に強く意識を持ち続けさせる仕掛けが大事だと思う。職場での仕事の生産性に繋がるという視点ではなく、純粹に幸せのためには自分は健康でありたいという視点を、子どもが心から発するようないい意味での優しいウェルビーイングを仕掛けてあげたいと思う。

2点目は、生活習慣の一番の場である家庭における改善が必然であり、家庭との連携が大事だと思う。更に、青森県学校保健推進計画の発展のためには、各事業におけるモデル校をより一層拡充し、これらの共通理解のために学校運営協議会を通じた地域との相互理解・協力体制をつくり、様々な連携、そして、県健康福祉部と共に県民運動にまで高めることがこれからの課題であると思う。

3点目は、学校では部活動があるが、まもなく国民スポーツ大会があるという中で、「健康であるためのスポーツ」という視点が大事だと思う。学校でのスポーツを「競技としてのスポーツ」と、先ほど説明にもあった、親しみ、楽しく、身近である「健康のための楽しいスポーツ」に分け、児童生徒自身と共に先生もそのように考える仕組みづくりが大事だと思う。青森県学校保健推進計画の方向性は問題ないが、そういう視点を若干加味していけば、子どもたちの意識を生涯を通じて変えていけるのではないかと思

う。プレイングマネージャー、プレイングリーダーのような形で、共に楽しくできることが大事である。

(知事)

県民の健康づくりについては、かなりてこ入れしてきたつもりだが、大人も子どもも厳しい状況であると考えている。野澤委員がお話したとおり、大人でも子どもでも自分自身で気付いてくれなければならない、いかにして気付きを導いていくかということを感じている。ウェルビーイング、幸せと健康は一緒であるという言葉により、踏み込んで話してもいいのではないかという気がした。弘前大学の中路先生方とお話した際に、ヘルスリテラシーという言葉について、訳すと「健やか力」で、「健やか力」とは何かということ、健やかであるかどうか、そのために努力しているかどうかに気付くことではないかということであった。子どもたちの分野にもウェルビーイングあるいは「健やか力」が身に付くような教育システムが必要だと思う。ある地域で肥満が多いということで、なぜ3食唐揚げを食べているのか聞くと、昔揚げ物が食べられなかったことから、塩をかけて食べると非常においしいからということであった。また、太っている子どもが多いのは、大皿で出されていくらでも食べられるという家庭の食生活の在り方が大問題であることを、10年以上前の保健師さんなどが集まった懇談会で厳しく言われたことがあり、そこから着手していかなければならないと思った。可能な限り食生活改善運動やだし活をやって、野菜摂取量だけは1人当たり50グラム増えたが、子どもたちが野菜を食べているのか非常に疑問に思っているところがある。一定の年齢の方は気をつけて食べるようになり、新年度の予算でも、若い人達に野菜を食べてもらおうというキャンペーンをする枠をとった。何度も繰り返し自らキャンペーンをしていく予定であり、最後までしっかりやっていく。

野澤委員からのお話にあったように、スポーツについては、競技スポーツだけではなく、遊んでいるようなものも非常に重要であり、教育の場面でいかにして子どもたちに理解してもらおうかということが非常に重要だと思った。不健康であると自分が不幸せになるだけでなく、例えば、お父さんが不健康が原因で亡くなったり入院すると、家庭や周りも巻き込むことになるため、健康の分野はお互いの幸せに関わるという話に繋げていければと思う。私も任期まで、子どもの健康と幸せ、ハピネスを語っていきたい。

(平間委員)

みんなで支える子どもの健康づくりということで、今回のテーマである「本県の未来を担う子どもの健康づくりについて」だが、コロナ禍を経て、新しい生活様式が定着する中で、学校教育においても、体と心の健康づくりは今後も重要な視点になると思う。

特に、家庭の価値観が多様化する中、子どもの望ましい生活習慣の定着の推進は、非常に重要な課題であると思っている。年齢が上がるとともに、朝食の摂取率や肥満傾向の割合の数値が悪くなる傾向は、子どもたちが大きくなり、社会人になっても継続していくのではないかと心配であり、それが短命県という結果につながっているとも考えら

れる。

普段、子育て支援の現場にいるが、乳幼児、幼児からの啓発が非常に重要だと考える。「楽しさアップ！子どもの健康づくり事業」では、1・2年生から「楽しい体育の授業づくり」など、様々な取組がこれまでも行われているが、長いスパンで、楽しく、いつでも、どこでも、誰でもといった視点や、教員研修の内容も、低学年にとどまらず学校全体で意識共有することが必要だと考える。

残念なことに、朝起きられない、つかれやすい、だるいという子が、支援センターの相談事業では多くみられる。連携先のドクターからも、コロナ禍の後、増加傾向にあるとの声もある。今後も子どもたち一人一人の生活状況を注意して見守る必要性を感じている。

学校教育においては、長らく「自分の命は自分で守る」という言葉が長く使われてきた。これと同様にこれからは「自分の体（健康）は自分で守る」の視点が、食育の取組にも重要だと考える。学校の授業で全ての取組を実施するのは非常に難しいと思うが、学校生活全体の中に、どのように取り入れていくかが重要だと思う。

今後、例えば、学校の体育の授業そのものを地域に開放して、大学の講師やプログラムをそこに招致し、新しい体力づくりや食育などを一緒に学ぶような、新しい取組を考える必要があると思う。私は学校のコーディネーターをしているが、コロナ禍が終わってから新しいボランティアの方を探していると、皆、体力が減退しており、非常に心配になる。地域の方の力を借りないと、地域の活性化が見えないのではないかと危惧している。

今後も、福祉、幼児教育、大学、マスコミによる県民への啓発事業、公民館の生涯学習などによるスポーツを通しての地域連携が大切であり、子どもたちが楽しく学べる現場や、教員の負担軽減にも繋がるのではないかと考えている。

教員が新たなアイデアを持ち、楽しく教育現場に反映できるよう、更に多くの方々の御協力をお願いしたいと思う。

(知事)

休み時間に走るだけでも非常にいいのだが、青森県の場合は冬場に走るといっても体育館だけでは足りないということもあるだろうし、子どもたちも様々な悩みがあると思う。コロナの期間は、校歌斉唱ができない、対面でいろいろできないなどの一つとして、運動もできなかったと思う。また、子どもだけでなくお年寄りも同じように、集会所に集まって様々なことをやることができなくなり、フレイルという状態が現実になっている。コロナで亡くなる方が多くなっていることもあるが、明らかにフレイル状態が原因となっているのがあると、健康福祉部が分析している。そこで始めたのがeスポーツといってゲームではあるが、結構目や体を使うものもあり、先日も高校生と老人クラブ対抗のボーリング大会が開催された。我々の年代はかなりボーリングをしていたが、この大会も非常に盛り上がり、勘所がある老人クラブが勝った。目と指を使うのは非常にいいことであるが、体を動かすための様々な方法があることが改めて分かった。かけっこ、鬼ごっこ、ドッジボールなど何でもいいが、平間委員から、体育の中に、大学の先生な

どからどうやって体を動かして遊んでくれるかということを取り入れるというアイデアをいただき、非常にいいと思った。それに加えて、今ICTの設備が非常によくなっているが、eスポーツ的なことでも体を動かせることから、従来からあるかけっこのようなものの導入や、ゲーム感覚で皆が一緒に体を動かせるような仕組みが大事になってくると思う。体育の先生プラスプロの運動のコーディネーターにより、スーパーマーケットを歩くだけでポイントが付くというような80歳までできるものや、これまでの運動部活動的なものではなく、ゲーム感覚でできて体を動かすことが楽しいという方向にもっていくために、教育委員会の中の様々なジャンルの方や大学の先生など外部の方々におもしろいアイデアを考えていただき、遊びながら体もしっかり動かして、1日30分は運動しているというようになればいいと思う。普通に歩ける状態がいいと思うが、雪道に対する歩道の整備もまだ整っていない部分があるため、雪が降っていてもできるようなことも考えることができればと思った。運動をコーディネートし、子どもたちを楽しませる、できれば祖父母も一緒にやればおもしろいと思う。

(戸塚委員)

先ほど、野澤委員から「ウェルビーイング」の話があったが、健康に関するこのような言葉としては、「クオリティ・オブ・ライフ」とか「サクセスフル・エイジング」、「ヘルスリテラシー」、「ウェルビーイング」などがあり、ライフステージという視点から、より積極的に個人の健康的自立をイメージするものになってきていると感じている。その中で、青森が先頭に立つ、子どもの健康づくりということで意見を述べたいと思う。

先ほど事務局から説明があったように、令和5年度は、第3次「青森県学校保健推進計画」の最終年度になっている。それぞれの数値目標については、項目によっては達成できていないものがあるが、ここ3年間ほど、新型コロナウイルス感染対策の対応に追われ、思ったような事業展開ができなかったことにも起因するかもしれないと想像するが、そろそろ、抜本的な、一歩踏み出すような施策の見直しが必要な時期に来ているものとも考える。

すなわち、「学校の保健教育」から、「子どものライフステージの視点に立ったヘルスリテラシー（健康教養、すなわち健康を決める力、健やか力）養成のための健康教育」への転換により、子どもたちの新しい時代の保健教育として「社会に開かれた教育課程」を実現していく時期だと考える。そして、長期的には、「青森が考える、青森だからできる、そして、青森が先頭に立つ、子どもの健康づくり」を視野に入れていく必要があると思う。

一方で、この言葉を美辞麗句に終わらせないためにも、中期的な視野から具体的な取り組みが重要である。

中南地区では、平成27年度より、中南地区の7市町村教育委員会と弘前大学との間で、中南地区連携推進協議会を発足し、管内の小中学校と連携・協働して、「子どもたちのヘルスリテラシー養成のための健康教育推進事業」を展開している。具体的には、少年期からのヘルスリテラシー養成を、包括的かつ体系的に行うための教育プログラムの開発と学校現場への実装を行っている。その中で見えてきたことは、子どもたちは、我々が思っている以上に健康への理解のスピードが速く、なおかつ、深さを持っている

こと、そして、知識を知恵として蓄え、自らの行動変容に繋げ、やがて、健康な生活習慣を構築する可能性を持っていると感じており、子どもの頃から同じことを継続することが重要だと思う。今の大学生を見ていると、これはこれというように分けて考えていると感じるため、ずっと繋がっているというところで、学校教育の中で役割を果たせる部分があると思う。この中南地区の取組は、青森県全域、全ライフステージで健康長寿の取組をしている弘前大学医学研究科の中路重之教授も参画しており、是非、連携活用すべきだと考えている。

青森県では、県はもとより、令和元年5月をもって全40市町村で健康宣言が行われたと思うが、この宣言は、首長である各市町村長の皆さんの見識と決意の表れであると感じており、この10年間に県民全体で健康長寿の実現を目指す機運の醸成が進んでいると思っている。実際、幼児教育、職域、自治体で具体的な活動が出てきており、それがすぐ終わるのではなく、形を変えながら継続できるような方向に進んでいると思うが、そこに教育のプロフェッショナルである学校が入り、「地域の実情に沿ったライフステージを一気通貫する青森のヘルスリテラシー教育」を確立できれば、素晴らしい取組となると思う。ヘルスリテラシーの構築を、各ライフステージのセクションでどのように担当するのか、子どもの来た道、ゆく道をしっかりと見つめた上で、将来的な健康的自立へのサポートをどのように具現化するのか、これまでの枠組みを超えた施策を計画し、社会実装したいところである。

その意味では、6ページにある県教育委員会の「今後の新たな取組」において、令和5年度からの6年間、新規重点事業として健康福祉部と協力しながら進めることが大きなポイントとなっている、「県民の未来の健康創造事業」に大いに期待するところである。是非、実効性のある事業展開をお願いしたいと思っている。

(知事)

長い時間をかけて考えやらなければいけないものを、将来対応分事業として10のテーマを設定し予算化した。今水産業そのものがあまりよくないが、作り育てる漁業の推進や、この健康の分野については非常に重要であり、改めてもう一度原点に立ち返って、どのように食べて、生活すればどうなるのかをきちんとチェックすることになっている。また、その一方で、根本的な原因は何かを見つめながら、体育、食育の楽しさに取り組んでいくことがテーマとしてある。中路先生とよく話をしているのは、すぐにはよくなるが、絶対諦めないでやっていこうということである。最初は、保健協力員や食生活改善推進員の方に、塩分濃度が高すぎるからキャンペーンをしてほしいとお願いしたが、任せるだけではいけないということで、自ら最前線でだし活・だす活をやってきた。子どもたちもおもしろいと喜んで参加してくれて、そこから少しでもだしを使って塩分を減らそうとか野菜を食べようということに繋がればいいと思いつつ取り組んできたが、その成果として、野菜の摂取量が1日50グラム増え、非常にありがたかった。ミニトマトを5個食べると50グラム増えるということで、10年前はミニトマトの生産が弱かったが、非常に増えた。一番摂取が簡単なミニトマトを中心として野菜の摂取量が50グラム増えたが、10年やってミニトマト5個だけかと思わずに継続していつもらいたい。だし活・だす活も新ステージになるが、メンバーも多くいることから続けて取り組んでいくことができる。諦めずに長くやっていくには、戸塚委員が言われたと

おりプログラムの開発が必要である。例えば、大学生が野菜を食べるよりはタバコを吸ってお酒を飲んだ方が楽しいとなると一気にダメになる。小さい子どもから高齢者まで、継続していけるプログラムをどのように開発し具体的にやっていくかであり、今お話しただいたことは、非常に重要であると思っていた。また、子どもたちは意外に聞いて見ていて実行してくれるという話があったが、私としては希望であり、喜びでもある。だし活・だす活で踊っていると子どもたちも寄ってきて踊ってくれた。10年間継続してやってきたそのような記憶が繋がっていく中で、少しは野菜を含めた様々な改善に至っていると思う。中路先生ともよく話すが、まさに「継続は力なり」ということで、絶対諦めないで続けていかなければならない。だからこそ教育委員会にお願いしたいのは、小さい子どもや、小学生、中学生、高校生が運動や野菜を意識するようしてほしい。タバコを吸ってはいけないのは分かっているけども吸ってしまう子どももいるが、小学校、中学校、高校に行くと必ず授業の中で、タバコを吸った肺と吸ってない肺を見せて、怖がらせている。そういったことも含め、フレイル状態になると、筋肉が固まり動けなくなるとか、血がドロドロになるとか、現実として結果どうなるかということを見せて、少し怖がらせてほしい。タバコで怖がるのであれば、高脂血症でも怖がると思うが、腎臓が使えなくなればどうなるかとか、糖尿から様々な病気になるということ、また、プログラムを開発し実装するという事について退任まで言い続けたいと思う。直接子どもたちと接する教育委員会だからできることがあると思うが、御家庭にいかにしてプログラムメニューを理解してもらえるかということをやらなければならぬと思った。青森が考え、青森だからできて、青森が先頭に立つ子どもの健康づくりということで、本県はずっと肥満傾向児出現率が全国トップであり、20年間一度もトップの座を譲れなかった。私は、教育委員会と首長部局は独立しているという強い考えで、予算はこちらで準備するし協力はするが、政治的中立を保って、教育をピュアにしてやってほしいということはずっと言い続けてきたが、この問題については何とかお願いしたい。また、戸塚委員におかれては、プログラムの開発等をよろしくお願いしたい。

(安田委員)

私から、今の時代の子どもたちの状況を踏まえた健康教育の充実ということで、「青森県学校保健推進計画」重点項目の中の最重点課題である「望ましい生活習慣定着の推進」についてお話しする。

まず、「体格、栄養・食生活」の肥満傾向児出現率についてであるが、本県では、冬期間、屋外での活動が制限されるため、どうしても学校以外では、室内（自宅）等で、スナック菓子などを食べながら、横になってテレビを見るとかeスポーツではないゲーム等をして生活する習慣があると思う。

また、朝食を毎日食べる子どもの割合に関しては、核家族や共働きの家庭が多く、親子共々朝の時間がないため、どうしても朝食が摂れないという話も聞いている。朝食の大切さについてもっと周知し、引き続き改善に取り組みなければならぬと感じている。

県教育委員会の主な取組の中の、「いきいき青森っ子健康づくり事業」において、健康教育実践研究校11校を指定しているが、指定されていない他の学校にも、同じような気概をもって取り組んでもらうことで、生活習慣の早期定着に繋がるのではないかと

思う。

次に、「身体活動・運動」についてである。平日に運動・スポーツを週3回以上する児童生徒の割合について、近年の各地域においては児童生徒数の減少等により、学校単位での毎日の部活動等ができなくなっている。また、小学校に関しては、先生方による指導・監督から、保護者・地域住民などのボランティアによる指導・監督へシフトしているためか、指導者の都合で毎日の練習ができなかったり、学校施設が思うように使えなかったりというような問題もあると聞いている。中学校が地域運動部活動へ移行するとなると、週3回の運動もますます難しくなるのではないかと危惧しているところである。

先ほど話があった「喫煙・飲酒・薬物乱用防止」については、各学校において指導を実施していると思うが、成長期の子どもたちだからこそ、徹底した喫煙・飲酒・薬物乱用を防止するための指導を更にお願ひしたいと思う。

「歯科保健」についても、各学校で取組を行っているところであるが、歯科検診の結果を踏まえた、夏休み・冬休み期間中を利用した治療や歯科保健指導について、これまで以上に周知するとともに、口元から健康が始まるという教えについて、歯科医師等からの講話などを通じた指導を充実させてもらいたいと思う。

私が子どものころは、数キロ歩いての登下校が当たり前で、それが毎日の運動の一つだった。時代の変化により、自分が住む西北五地域でも過疎化が顕著に現れ、小中学校はもとより高校も統廃合が進み、スクールバスや保護者の送迎が多くなっている。歩いての登下校が少なくなっていることが、毎日の運動不足に繋がっていると感じる。

「青森県学校保健推進計画」に示されている数値目標の達成と維持・持続を目指し、「青森県学校保健・安全・給食研究大会」でのより良い実践発表と「楽しさアップ！子どもの健康づくり事業」の取組等を通じて、学校体育はもとより、我々大人も社会体育の充実を図り、短命県返上に向けて進んでいきたいと考えている。

(知事)

朝は親御さんも忙しい。カロリーや糖分量を取らないと体も頭も動かなくなるが、大人になっても朝に甘いコーヒーを飲み、菓子パンを食べると癖がつくと困るため、簡単に作れて子どもたちも意外と食べてくれるおにぎりや牛乳を食べましようという運動など、様々な工夫を食生活改善推進員と一緒にやってきたという思いがある。どうやったら簡単に朝食を作り食べられるかというのが一つのテーマとしてあると思うが、朝食の大切さについて、子どもたちだけでなく親御さんも含めて気付いていただければありがたい。

歯のお話があったが、昔に比べて虫歯は減り、学校歯科医の方々、親御さん、先生方の努力があったと思っている。しかし、それとは別に、糖分やカロリーの取り過ぎが原因で歯が抜ける歯周病となっていることから、80歳になった時に自分の歯を20本以上保つことができる食生活をすることやブラッシングをしたり歯にフッ素を塗ることについても予算に入れた。歯の健康は腎臓に最も影響を与えるなど、体全体の健康にも繋がり、逆に体調が悪くても歯に影響を与えるということを理解してもらえるようになってきていると期待している。先ほどのヘルスリテラシーという分野においても、着々と様々なことが進んできたと思っているが、結局最終的にはオーバーカロリーだと思っている。繰り返し何度も食生活改善運動やだし活・だす活等を通じて、野菜の効用を伝

え、油を取り過ぎないようにするというをやってきており、今後も健康福祉部が取り組んでいくが、生活習慣病が様々なことに繋がっていき、子どもたちが生活習慣病状態になることが、青森県の課題にもなっている。今話し合ったことや予算の中で段取りしたことについて、任期が終わるまで力を入れて取り組んでいきたい。

県としても、健康福祉部関連のものは毎回最下位であり、非常に切実である。糖尿病が進むと免疫力が下がるが、もとは運動と食べ方の問題であり、朝昼晩バランスよく食べることが悲願である。今までの取組の成果が必ず出てくると思っているが、どういう課題がありどうして小児肥満になっているかというデータを取り、そのリアルな数値を親御さんや祖父母の方にもお見せして、かわいい子どもや孫のために、食事のプログラムはこれ、運動については体を動かして遊ぶということを提案するので協力していただきたいということを、6ページ目にある事業により取り組んでいきたいと思っている。

(和嶋教育長)

本日は、本県の未来を担う子どもの健康づくりについて意見交換をさせていただき感謝する。

県教育委員会のこれからの取組について、本日いただいた様々なお話を踏まえ、引き続き、学校、家庭及び関係機関等と連携しながら、子どもの健康づくりを推進していきたいと考えている。

(知事)

幸せの一つに健康があると思う。それにより子どもたちが伸び伸びと自分が向かいたい道に向かっていけることになっていくと思うし、よく学び、よく動き、しっかり考えて食べるということを小さい頃から学んでもらうことの大切さを、委員の皆様とお話して感じた。行財政改革にも取組み、それなりの成果が上がったと思っているが、健康づくりについても様々なことをやり、野菜摂取量が50グラム増え、250グラムが300グラムとなった。250グラムが300グラムになったのは比率としてはすごく、なぜかミニトマト産業が盛んになったが、様々な野菜に注目が集まり、中南地区での色々なタイプの野菜づくりにも繋がった。この50グラムがもう少し増えると、野菜の力で、塩分を出すだけでなくミネラル分により体の問題がある部分を、先々絶対よくしてくれると思うし、食べたお菓子をリセットしてくれることにも繋がると思っており、歯がいいと人参やトマトなどの野菜をたくさん食べることに繋がる。私は健康づくり分野もやれることはやったと思っているが、まだ何回かスーパーマーケット等を回るため、県産品愛用だけでなく地産地消と健康づくり、野菜、魚、肉を食べることをお話ししたい。

確かな学力、生きる力ということで教育委員会は非常によくやってきてくれた。生きる力の中にヘルスリテラシー、健やか力ということで、自ら気付き、1日1万歩でも、350グラム野菜を食べても、運動してもいいので、何か一つヘルスリテラシーに基づいた行動変容を子どもたちがとるようにしていくために、この6ページの取組をしようと思っており、県教育委員会には、是非これを実践していただきたい。教育と政治は分離

しなければならないが、この健康づくりは一緒だと思っている。健康福祉部とも連携して一緒にやっていくことになっているので、教育委員の皆様におかれては、健やかに幸せに生きていくための健康ということについての意識をどうしたら持ってきて、実装し実践できるかについて、格段の御指導をいただきたい。今後とも青森県の子どもたちをよろしく願います。